

《翻 訳》

## 中央アジアのタタール人

### 第3章 19世紀末における中央アジアのタタール住民の人口と就業状況 (1897年の人口調査から)

リナット・シガブディノフ (著), 高橋 巖根 (訳)

Tatars in Central Asia,  
Chap.3 Numbers and Employment of Tatar Population in Central Asia  
toward the End of 19th Century (from the Census in 1897)

IWANE TAKAHASHI

#### キーワード

タタール (Tatars), トルキスタン (Turkistan), カザフスタン (Kazakhstan), 帝政ロシアの反タタール政策 (anti-Tatar Tsarist policy), メシチャニン (meshchanin, “peasants in cities”)

周知のように、ロシアから中央アジアに至る道は、オレンブルクに始まるが多かった(いわゆるシベリアライン [訳注: 18~19世紀に西シベリア南部に作られた城砦による防衛線] を通ることは稀であった)。この道は「キルギスのステップ」、つまり今日のカザフスタンを通っていた(カザフ人は、公式にはキルギスと呼ばれていた)。カザフスタンの住民は3つの部族連合体に分かれていた: 西部のウラルとエンバの両河川の間に住むキシ・ジュズ(小ジュズ)、中部に住むオルタ・ジュズ(中ジュズ)、バルハシ湖地方に住むウル・ジュズ(大ジュズ)である。キシ・ジュズとオルタ・ジュズは1830~40年代にロシアの支配下に入った。カザフスタン併合の始まりの年は1731年と考えられている。ウル・ジュズに対するロシアの影響は、1820~30年代に広がっている。カザフスタンの併合地域は「ステップ総督領」となった(首府はオムスク)が、これはウラル、トゥルガイ、アクモリンスク、セミパラチンスクの4州から構成された。中央アジアの征服地域を運営するために1867年に、タシケントを首府とするトルキスタン総督領が創設された。このいわ

ゆるトルキスタン地方は、次の5州に分けられていた: シルダリア, フェルガナ, サマルカンド, セミレチエ, ザカスピ (後者2州が併合されたのは19世紀末)<sup>1)</sup>。

この広大な地域の民族分布は、さまざまな条件により19世紀の終わりには極めて雑多であり、20を越えるさまざまな民族が住んでいた。他の地域で発生した騒乱、戦争、飢餓や、職を見つけるという望み、政治的・宗教的な迫害により、近隣ばかりではなく遠隔地からもこの地に人びとが追いやられてきた。概して、こういった社会経済的・政治的動機がタタールの人びとが中央アジアに移住する理由となっていた。

19世紀後半に中央アジアに住んでいたタタールの数を正確に定めるのは、今のところ不可能である。公式の統計情報は、研究者にとってさして信頼に足るものではない。相当数の数え漏らしがあり、それはデータの収集や分析に欠陥があったことと関連していて、ゆえに全体像は不完全で歪んだものとなっている。

1897年の第1回国勢調査の策定にあたっては先行する事例の経験が考慮されたが、にも関わ

らず多くの欠陥が見られた。何よりも、調査を通じて住民の法的な居住地と現住地を把握しようとした試みは事態を複雑にただけであり、大きな混乱を生んだ。母語に関する回答に基づいた民族構成の確定は、歪んだ像を描き出した。それに加えて、抑圧を警戒した多くのタタール人は、反タタールの措置の対象ではない他のムスリム系民族の代表を装った。この調査の欠陥の相当数は、住民の自立に関する指標の策定に関するものであった。中央アジアに関する調査では、この指標に関するデータは民族別を考慮することなく示されたものであった。策定作業のために採用された分類基準では、中央アジアのタタール住民の社会生産的・職業的構成を確定することは不可能であった。分類基準自体が明瞭ではなく十分でもないため、多くの疑いを呼ぶものとなっていて、答えがあり得ないものも少なくなかった。調査シートや記入上の注意に関する様式の曖昧さ、中央調査委員会の説明や指示の遅延、指導部や集計事務員の不慣れさ等々の欠陥が、あちらこちらの設問の間に不一致を生じさせていた。こうした事実はおそらく、この調査のフェルガナ州に関する部分において、タタール住民の全数・性別・居住地（都市か農村か）だけが示されたに過ぎないことで説明できるだろう。この州のタタールに関する他の指標は、カシュガル人、キルギス、キプチャク、カラカルパク、サルトその他のテュルク系一般によるグループに含められていた。

したがって、1897年国勢調査に関する上記、およびその他の欠陥により、調査者に可能なことは著しく限られている。にも関わらず、この国勢調査の結果は最も完全で組織的な史料の一つであり、19世紀末における中央アジアのタタール住民の居住分布、階級構成、就業状況、識字率等に関する全体像を表しているのである。

カザンで発行された「ヴォルガ・ヴェストニーク」紙は1885年に、「ロシアは中央アジア支配を確固たるものとし、3万平方キロメート

ルに及び350万もの人口をもつ土地を手にした」と書いている<sup>2)</sup>。19世紀末にかけてカザフスタンには246万5735人、トルキスタンには528万983人、中央アジア全体では774万6718人が住んでいた<sup>3)</sup>。

#### (1) 中央アジア地域のタタール住民の数<sup>4)</sup>

1897年ごろのタタール住民の全数は6万193人であり、調査地域の現住民の総数の0.8%を占めた。カザフスタンには4万1761人が住んでいて、全体の69.4%を占め、トルキスタンでは1万8432人が住み、30.6%を占めた。

カザフスタン地域に住んでいたタタール住民が多かった点に関しては、いくつもの理由を挙げることができる。すなわち、ステップ地帯であるカザフスタンがロシア本土との国境に近かったこと、および18世紀以来ロシア帝国の版図に加えられようとしていたカザフステップに住む遊牧民の「文明化」にタタールを引き込もうとする政策を帝政政府がとったことである。この時期、ヴォルガ・タタールがカザフスタンの遊牧民の間で商業活動を行うことが奨励されていた。帝政財政は資金を投じて、モスク建設やクルアーンの出版（1796年）を行い、カザン・タタールをムッラーや教師としてステップ地方に派遣した。タタール語はこの時期、帝政官憲とカザフスタンの遊牧民の公式の共通語であった。宗教的な共通性と言語的な近似性により、タタールはステップの先住民と密接な接触を保っていた<sup>5)</sup>。程なくステップ各地の都市でタタール共同体の数が大幅に増加したことは、驚くべきことではない。

この地域のタタール住民の相当数は都市部に住んでいた。すなわち、3万6201人が住み、60.1%を占めた。

#### (2) タタール住民が千人以上いた中央アジアの都市<sup>6)</sup>

カザフスタンでは、タタールが千人以上住んでいる都市がトルキスタンよりも多かった。カザフスタンでは、全タタール人口の77.5%が6

つの都市に集中していた。トルキスタンでは、タタールが千人以上住んでいる都市は3つだけだった（ただし、この3つ以外の都市でもタタール人口は急増していた）。カザフスタンでは、カパルに961人、レプシンスクに900人、500人以上がカザリンスク、プルジェヴァルスク、トルキスタン〔訳注：カザフスタン領にある都市〕に住んでいた。カザフスタン都市部のタタール人口は、それ以外の中央アジアよりも1万2千人ほど多かった。

興味深いことに、ステップ地方のすべての都市が18世紀にロシアの支配下に入った二つのジュズ（キシ・ジュズとオルタ・ジュズ）の領内にあった。これらの都市は基本的に、カザフスタン国境のロシアの城砦線の上か、1820～50年代に建設された城砦や軍事集落のある場所にあった。

おそらくは、比較的大きな社会経済的・政治的な安定性が移民の重要な条件の一つになっていて、カザフスタン諸都市へのタタール来住の大きな流れを生んでいた。一方で、トルキスタン地方の併合は1890年代になってようやく完了した。1880年代にはまだ、ここでは軍事行動が続いていた。1881年にはアハルテケ・オアシスが征服され、ザカスピ州に編入された。1884年にはメルヴ、ヨロテン、セラフスの各オアシスとテジェント流域の各地域が、1885年にはペンデ、1886年にはアテクが併合された（ロシアが最後の併合地域であるバミールを押さえたのは、1900年前半になってからであった<sup>7)</sup>）。トルキスタン南部の併合に時間を必要としたこうした状況は、セラフス、テジェント、カカといった南部都市でタタール人口が少なかったことで説明できるかもしれない。フジャンド、ウラテュベ、ジザクといった旧ブハラ・ハン国の都市では、タタール人口は決して少なくなかった（ブハラ・ハン国はロシアの支配下に入った後も、形式的にはある程度の独立を保っていた）。

当然ながら、移民の波にはさまざまなレベルの他の理由もあった。例えば、貿易ルートの開

拓、貿易センターの発生、産業の発達などの社会経済的な要因や、軍事的な城砦や集落にはロシア人が集められるといった行政的な要因である。アレクサンドロフスク堡壘〔訳注：現フォルト・シェフチェンコ〕には、18人のタタールが住んでいた（男性11人、女性7人）。タタール住民の移民の波に大きな影響を与えたのは、新しく併合した領地にロシア人を入植させようとした帝政政府の植民地政策であった。この目的のために、トルキスタンへの移住許可を与える決定は「ロシアにルーツをもち、ロシア正教を信じる者にのみ」<sup>8)</sup>下された。このため、トルキスタンにおけるロシア人の数はタタールを上回っていて、例を挙げれば、シルダリア州ではロシア人が3%、タタールが0.3%、サマルカンド州ではロシア人が10.4%、タタールが0.3%であった。

帝政政府による植民地政策のため、タタールには深刻な制約があった。その一つに、トルキスタンにおける住民登録の問題があった。タタールがどこかの都市ないし農村に登録できるのは、警察機関がこの人間は政治的に信用できるという証明書を発行した場合に限られていた。トルキスタン地方で住民登録に関する制約の問題を避けて通るには、しっかりとした賄賂を与えることしかなかった。ゆえに、トルキスタン地方の官吏はタタールの住民登録においては、わざとさまざまな障害を仕掛けることが多かった。賄賂なくしては、住民登録のプロセスは判を押したように即座に停止された。下級補助官吏として採用された者すら、例外ではなかった。例えば、下級補助官吏であったサイフッディン・ファクトリンは、フェルガナ州のある市団体への登録許可をもらうのに数年を費やした<sup>9)</sup>が、果たせなかった。「トルキスタン地方統治法」に従えば、下級補助官吏は信教の別を問わず、兵役期間を終えた後はその地に永住することができるという権利を有していたにも関わらず、である。

1897年の国勢調査では中央アジアに関して、ロシアの他地域からの移住者の民族籍に関する

記述はない。そのため、残念ながら、この地に來住したタタール住民の移民の波を追跡することはできない。この調査から分かるのは、この年までにカザン県から中央アジア地域に移住したのは1万2690人であるが、この中には明らかにタタールでない者も含まれている。

### (3) タタール住民の性別による数<sup>10)</sup>

中央アジアのタタール住民は、女性よりも男性の方が多かった。よく知られているように、1860～70年代の改革期には、ロシアの男性人口は総じて女性人口を上回っていた。言い換えれば、男性はより可動的であり、活動的であった。

カザフスタン諸州では、トルキスタン諸州に比べれば、タタール住民は性別の指標においてはより均等に分布していた（ちなみに、タタール人口が最大だったのがウラル州であり、最小だったのがトゥルガイ州である）。1897年の国勢調査では、カザフスタンのトゥルガイ州では「タタール、モルドヴィン、マリ、バシキールは定住地域の住民に含まれ、ロシア人は主として北方諸郡、すなわち、コスタナイ郡およびアクテュベ郡の一部に住んでいた」<sup>11)</sup>ことが明らかになっている。トゥルガイ州南部を構成するより面積の大きい二郡、つまり、トゥルガイ郡とイルギズ郡は事実上、ロシア人が従事する農業に適した土地ではなかった。なぜなら、その土壤の大部分はソロンチャック（白色アルカリ土）と砂から成っていたからである。それだけでなく、トゥルガイ地方の州境の一部はブハラ・ハン国やトルキスタン諸州（サマルカンド・フェルガナ・ザカスピ）と近接していて、そちらにも相当数のタタール住民、特に女性が住んでいた。

### (4) タタール住民の家族状況<sup>12)</sup>

(\*フェルガナ州を除く。同州のタタール住民の家族状況は1897年の調査では示されていない)

トルキスタンでは未婚のタタールの数が多

かったのに比べ、カザフスタンでは既婚のタタールが多数であった。明らかにこれは、タタールの進出が早かったカザフスタンに比べ、トルキスタンで若い世代のタタールが多数を占めたことを表している。両地域とも未婚男性の方が未婚女性よりも多く、とりわけトルキスタンの未婚男性の数は顕著に多かったが、国勢調査では「まだ文化が行き届かない地域では、家族持ちよりは厳しい生活苦に耐えられる独身者の方が多くなるものである」<sup>13)</sup>と説明されている。

タタールの既婚女性の数が既婚男性よりも多くなるのは、タタール女性の一部が他民族の男性と結婚するからであると説明できる。アフマロフは、「カザンはアジアの裕福なムスリムが花嫁を探す市場として機能していて」、ブハラやサルト地域、その他の中央アジア、シベリア、オレンブルク、アストラハンなどの各地方から来た商人が「息子たちをカザンで結婚させたのである」<sup>14)</sup>と書いている。このように、19世紀半ばには民族間結婚が盛んであった。しかし、1860～70年代の改革期に入ると、あまり見られなくなり少なくなった。タタール既婚女性の数が多いのは、ロシア政府が加えた社会経済的な制約に関連して、彼女たちの夫が別の民族籍で登録することを強いられたからかもしれない。

### (5) タタール住民の階級構成<sup>15)</sup>

(\*フェルガナ州を除く)

地域のタタール住民の中の最大のグループは、メシチャニン（都市下層階級）である。この階級に属する者が多いことは、地域の植民地化の過程によって説明することができる。例えば、「コスタナイ市が建設され、郊外に農業集落が作られることが決まると、当時ステップであったこの土地の肥沃さについて聞きつけた多くの農業移民たちができたばかりのこの都市に殺到して、メシチャニンとして住民登録して都市人口を構成し、しかしその大多数が農民同



様、農業に従事したため、1880年代末にはコスタナイ郡およびアクテュベ郡の一部にも集落が作られた<sup>16)</sup>。このような状況はこの地方他の地域でも見られたと、ヤシュノフは指摘している。彼は、トルキスタン地方の農業による植民地化の始まりを1874年としているが、それは移民たちが移民集落を築きながら定住した時点を指す。ヤシュノフは、「移民たちはなぜかメシチャニンとして登録され、多額の印紙税を払っている<sup>17)</sup>」と書いている。このように、メシチャニン階級に入った一部のタタール住民は、農業に従事しながら基本的には郡部に住んでいた。だが、一部のメシチャニンは都市に住みながら農業に従事していた。例を挙げれば、1874年からカザリンスクに在住したムハンマド・ザリフォヴィチ・アフメトジャンフ、1884年にフェルガナ州オシュ市に生まれたスレイマン・アブドゥッコヴィチ・サビトフなどである<sup>18)</sup>。ヴェールヌイ市のタタールのよう、牧畜業に従事したメシチャニンもいる。メシチャニン階級に登録した退役将校としては例えば、退役下士官のヒサムッディン・ファトフッディノフ、アブドゥル・ムタラブ・アブドゥルヴァガポフ、アブドゥル・ナフィック・シャイドウツリンらがいる<sup>19)</sup>。それ以外にもこの階級には、タタール住民のさまざまな人びとが入っている：彼らは陶工、零細商人、小規模な家主などで、基本的には都市階級の低層民であった。

中央アジア地域に住んでいたタタール住民のもう一つの大きなグループは農民階級であった。この階級のタタールの主体（35%）は郡部に住んでいたが、都市部でも相当数の住民（33.3%）を数えることができた。これは資本主義の発展と関連していて、農民が農業を離れてさまざまな商工業分野の職に引き寄せられ、都市に定住して家族を呼び寄せて、職人や零細商人となったが、公式統計では依然、出身階級により「農民」とされていた。また、当然ながら、都市や近郊に住みながら農業に従事しているタタール農民も決して少なくなかった。その例としては、カザン県カザン郡ヤング・キシェット

郷の出身で1872年にシルダリア州ペロフスクに來住したムハンマド・サファ・ムハメトジャンフが挙げられるが、彼は約15.8ヘクタールの借用地で野菜や果物を栽培していた<sup>20)</sup>。

この地域のタタール住民で目立つのは、コサック階級に属する者たちである。コサックは兵役階級であり、招集されれば自前の軍馬や軍服、兵器を携えて従軍する義務があった（歩兵であっても軍服と兵器は自前であった）。彼らは農業に従事し、統一された指揮系統を備え、それぞれの名前をもつアタマンを長とする各部隊に分かれていた<sup>21)</sup>。コサックの集落に登録されたタタール農民も、どうやらコサック兵としての地位を獲得していたようだ。カザフスタンではコサック兵の階級として数えられたタタールが7388人いたが、彼らのうち6306人がウラル州に住んでいた。トルキスタンではコサックとされたタタールは総勢357人で、うち249人がセミレチエ州に住んでいた。

この地域のタタール商人は全部で1366人で、その大半は都市部に住んでいた。彼らの中には第一ギルド〔訳注：商人階級は資本額に応じていくつかのギルドに分けられていて、第一ギルドは最も資本額の多い者が属した〕の商人がいた：ムハンマド・アフメトジャンフ・バキロフ、アブドゥルヴァリ・アフメトジャンフ・ヤウシェフ、ムルタザ・アブドゥラフマノヴィチ・イブラギモフ、ガゼトウツラ・バヤジトフや、タシケントの商人であるシリバン・ヒサムッディノヴァ・フサイノヴァ、サイダ・ムハメドヴナ・フサイノヴァなど。だが、多くは第二ギルドに属した：ユスブ・ウスmanoヴィチ・ビシェーエフ、イズマイル・ファトクツリノヴィチ・ダラトカジン、アブドゥツラ・ムルタジン、ムハメト・ラヒモヴィチ・ダウトフ、女性商人にビビガイシャ・アブドゥルカリモヴァ・アダガモヴァ、ビベイヌシュマ・フサノヴァ・ハリロヴァ、ザリファ・セイトヴナ・ガツビヤソヴァらが出た。文書館に保存された文書によると、1895年にタシケント一市で30人以上の第二ギルドの商人がいた<sup>22)</sup>。大商人の多

くは銀行に口座をもっていた。例えば、1900年1月1日付けで、上記のバキロフがもつ「コーカサスとマーキュリー」商會が2148ルーブル、A.G.フサイノフ（上記に言及なし）が137ルーブル、ムルタジンが1024ルーブル、ヤウシェフ兄弟が29218ルーブルを口座に預けていた。ヴォルガ・カマ商業銀行タシケント支店の口座には同日付けで、バキロフ兄弟の商會が6137ルーブル、ビシェーエフが122ルーブル、ヤウシェフ兄弟の商會が164ルーブル、ヤウシェフ兄弟の相続人が160ルーブルを有していた。これ以外には、ヤウシェフ兄弟の商會が特別当座預金に9147ルーブル相当の有価証券をもっていた<sup>23)</sup>。

地域のタタール商人の総数は、商人階級として登録された数よりもかなり多かった。これは、農民出身の商人が住民登録の際には農民とされたためであった。例えばセミレチエ州の農民アフメトジャン・ナスルリンの場合、1875年に取得した商業資格証により零細商人として働いていた<sup>24)</sup>。

中央アジアでは上流階級に属したタタールは少なく、その多くは都市部で暮らしていた。1897年の国勢調査によると、ごく少数の貴族(0.2%)が郡部に住んで、官吏ないし将校を務めていたようである。将校であった者は、砲兵隊中尉などとして現役軍にいた。その一人であったサラトフ県出身のタタール貴族ユスフ・ハミトヴィチ・エニケエフは前線部隊で勤務していた<sup>25)</sup>。

総じて19世紀末に存在していた階級区分は、住民の就業実態を反映していなかった。資本主義の発展は住民の就業状況に一定の変化をもたらし、あれこれの階級に属するという事は純粹に名目的なものであり、紙の上だけに存在するもので、それは意味するところを表すものではなかった。しかし、ある階級から別の階級へ移動するには、多額の資金が必須であった。例えば、商人階級になるためには一人あたり40ルーブル、メシチャニンになるためには15ルーブルを支払うことが必要であり、「6人家族が

いたとすると、前者なら240ルーブル、後者であれば90ルーブル必要だった<sup>26)</sup>。当然ながらそんな額が各家庭にあるとは限らず、特に農民家庭ではなおさらであった。これに加えて、帝政政府の植民地政策は、「キリスト教信仰をもつ農村住民であるロシア臣民」にだけ特権を認めていた。これらロシア系移民に対しては、働き手一人あたりに最大で約11ヘクタールの土地が割り当てられ、最初の5年間は農業税が免除され、次の5年間は半分の額を納めるとされた。補助金も与えられたが、1888年時点では家族あたりの平均額が97.5ルーブルであった。他にも、国庫の負担で農業機器が貸し与えられたりもした<sup>27)</sup>。これらの特権は、ロシア系でもキリスト教徒でもないタタール移民のような人たちには適用外であった。加えて、彼らは自発的な移民とされ、新しい土地で自ら基盤を築くことを強いられた。

#### (6) タタール住民の職業構成<sup>28)</sup>

(\*フェルガナ州を除く)

中央アジアのタタール住民を構成する第一のグループには、行政、司法、警察、社会サービス、民間の法律業、軍隊、自由業などが含まれる。この非生産業とも言うべきグループに属する人びとの全数は5078人であり、タタール住民の8.6%を占めていた。このグループは中央アジア全体のタタール住民の中では最小であったが、カザフスタンだけで見るとより多くの割合を占めていた。明らかにこれは、カザフスタンが後に併合されたトルキスタンよりも、政府にとっては官僚によるコントロールを厳しくする必要も、国境管理や地域住民との対立の可能性に備えてより多くの軍隊を置かなければならない必要も薄い土地であったことから来ている。タタールは行政機構の中では基本的に通訳官として勤務していた（例えば、トルキスタン総督府のディバエフ、イブラギモフ、チャヌイシェフ、ベクチュリンや、スコーベレフ管区裁判所のスレイマン・サビトフ、ハイルツラ・ラフマ

トゥリンのような事務員など)<sup>29)</sup>。行政機構で働いていたタタールは全てで264人だったが、カザフスタンに80人、トルキスタンに184人いた。このグループには、法廷や社会関連施設などでの民間法律業で働いていたタタールも含まれている。バリトルドによるとその数は多くはなかったが、「元来はヨーロッパ・ロシアでユダヤ人に対するものであったが、この地ではムスリムに適用された非キリスト教徒に関するロシアの法律のせいで、都市の自治組織におけるタタールの関与は、その数から期待されるものよりも弱かった」。例を挙げれば、1902年にセミレチエの5都市のうち、カパル市のみムスリム1名が市の長老たちの助手を務めていた（彼は1904年には長老となっている）。ヴェールヌイ市と周りの5郡にある都市では、孤児や寡婦を後見する裁判所のメンバーにムスリムがいた<sup>30)</sup>。

軍勤務のタタールは838人で、411人がカザフスタンに、427人がトルキスタンにいた。彼らは基本的に下級役人で、トルキスタン軍管区の軍にいたタタール将校は30人にも満たなかった。

1897年の国勢調査によれば、宗教界のタタールは753人を数え、455人がカザフスタンに、298人がトルキスタンにいた。カザフスタンでかなり数が多いのは、カザフ遊牧民の「イスラーム化」を奨励したエカチェリーナ2世時代の帝政政府の政策に由来するものである。後に、帝政行政はタタールのムッラーをロシア政府の危険な敵と見なすようになった。カウフマン総督は、タタールの宗教人が中央アジア地域に永住するのを全面的に禁じた。彼は、「ムスリムの宗教的プロパガンダは、ステップ住民に対するロシアの政策の利益にかなうものではない」と書いている<sup>31)</sup>。バリトルドが指摘するように、「トルキスタン地方の建設者であるフォン・カウフマンは、おおむねムスリム宗教界と関連施設を無視する体制を維持していた。チェルニャーエフ [訳注：カウフマンよりも前の1865～66年にトルキスタン軍事総督を務めた] は、公式の命令によりカーギー・カリヤンと

シェイフル・イスラームの職を維持した [訳注：前者はロシアの保護領であるブハラ・ハン国の司法長官、後者は宗務長官] (当時、後者は前者の兄であった)。カウフマンの時代になると、この二職は廃止され、以来トルキスタン地方には互いに対等な個々のイスラーム法廷があるのみで (例えば、タシケントの4区にはそれぞれの法廷があった)、最高法廷などはなかった。オレンブルクのムフティー (イスラーム指導者) が派遣したムッラーたちは、カウフマンの命令で追放された。彼はだいたい、トルキスタン地方に確固たるイスラームの拠点を組織しようとする試みを全て断念させていたが、「すでに存在する組織にはあるがままで我慢することを許し、政府の側からはいかなる支援も行わなかった」<sup>32)</sup>。

この「非生産業の」グループには他に、医師、新聞・雑誌の編集者、自由業も含まれていたが、何と云ってもタタール知識人の多くは教師であった。

タタールの第二のグループは「半生産的な住民」から成っていた。このグループに属する者の全数は26180人で、これは全タタールの44.1%にあたる。このグループに入るのは、商人、運送業者、都市交通・水上交通・鉄道関係者、家政婦や日雇労働者 (つまり、住民に対し奉仕する者たち) などであった。

このグループのかなりの部分 (29.7%) は商業活動に従事していた。タタールが扱った商品は多岐に及び、家畜、穀物製品、建設資材、燃料、布製品、衣料、革製品、毛皮製品、食器などがあつた。タタール実業家の多くは、農業用品の商い (4877人)、布製品・衣料の商い (3824人)、革・毛皮製品の商い (2096人) に携わつた。タタール商人は都市部に住み、都市民の39%以上を占めたが、基本的には零細商人だった。大手のタタール商人は、何か一つの品目に絞つた商いを行なつていた。例えば、フェルガナの第一ギルド商人であつたアフメトガリ・フサイノフは羊の毛皮や毛織物、セミレチエの商人チャヌイシェフは茶、タシケントの商人ヤウ

シェフ兄弟は手工業製品を扱っていた。彼らの多くは商店を所有していた。ヤウシェフ兄弟には3つの商店があり、そのうち2つがファッション小売、残る1つが生活用品の店で、ラシャ、毛織物、亜麻布、綿布を売っていた。また、これら商店では60人以上が勤務していた<sup>33)</sup>。

運送業者の主なものでは、白タク業が2124人、水上交通の従事者は多くはなく41人、鉄道で働いていた者は172人であった。中央アジアの水上交通はアラル海や主要河川に関するもので、これらの水域では漁業が行われていた。鉄道網の建設は中央アジアでは1880年代に始まった。最初に建設されたのはザカスピ鉄道であり、戦略的な価値ゆえに軍の管轄とされた。建設の最初の段階で、行政は地域の各地方や各民族出身者から労働者を雇い入れた。ザカスピ鉄道のトップは1886年に、「第一建設区間と第二建設区間では、極めてさまざまな地域や民族の出身から成る労働者たちを使わざるを得なかった。レズギン人、ノガイ人、スモレンスク・キーウ両県のキリスト教徒、トルクメン人のテケ族、メルヴ人、ヒヴァ人、そして、馬上交通の馬追としてカザンとヴォルガ周辺出身のタタールが雇われたのである」<sup>34)</sup>と書いている。

鉄道建設現場における複雑な労働条件や行政による酷使は、労働者たちによる騒動を引き起こすことが珍しくなかったが、タタールもそこに積極的に参加した。1897年8月のムルガブ区間での騒動は、行政が帰りの交通費を支給することを拒否したことに端を発したもので、1500人の労働者が加わっていたが、その半数はタタールとペルシア人であった<sup>35)</sup>。

1880年には政府はザカスピ第一予備大隊を創設する決定を下していたが、これは1885年に名称を変えザカスピ鉄道大隊となった。ロシア本土にあった鉄道部隊を基に創られたものである。1886年にはザカスピ鉄道第二大隊が創られた。兵士たちは最も熟練を要する建設作業を担当し、彼らが出動することにより各区間の作業の完成度は高まった。この大隊に集められたのはロシア中央部出身のロシア人だけであった。

鉄道部門の労働者の民族構成は帝政政府の政策を反映し、ロシア人の特別性と他民族への支配権を認めるものであった。したがって、鉄道建設の初期にはすでに、ロシア人1017人に対して、非ロシア人としては、ペルシア人384人、トルクメン人113人、ウズベク人74人、レズギン人45人、タタール29人、アルメニア人28人、ポーランド人22人、ドイツ人8人、その他の民族89人が働くのみであった<sup>36)</sup>。

非ロシア人労働者の相当部分は牽引作業に従事していて、路線や施設の維持、列車の牽引、車両の維持などに携わっていた。彼らは基本的に日雇い労働者で、かなりの比重を占め、線路・工場・車庫の最も組織化された労働者をつなぐはたらきをしていた。正規労働者（その中でも機関士は労働者の貴族階級であった）は、日雇い労働者と違って高い賃金を受け取り、一定の特権を有していた。鉄道関係の正規労働者は、圧倒的にロシア人が多かった。1897年にザカスピ鉄道で働いていた4006人のうち、ロシア人は3730人、非ロシア人として、ウズベク人39人、トルクメン人31人、ペルシア人54人、タタール13人、アルメニア人11人、その他の民族128人であった<sup>37)</sup>。「オレンブルク線（タシケント鉄道）と中央アジア線（ザカスピ鉄道）の両方で働いていたのはほとんどロシア人だった」と、1908年の「フェルガナ地方新聞」は伝えている<sup>38)</sup>。

タタール最大のグループは生産業の人口であり、この時期の中央アジアの全タタールの47.3%を占めた。このグループには、農業と工業に従事したタタールが含まれる。このグループで農業に携わる者は全タタールの31.8%を占めた。土地の耕作を行なったタタール農民は、この中で最も大きな集団であった。中央アジアには1万6363人がいたが、彼らは小麦、大麦、米、キビ、トウモロコシ、モロコシを栽培していた。当時の記録によると、タタール農民は中央アジアで最初にじゃがいもの栽培を始めた。中央アジアの食料事情にとって重要なのは、緑豆、ひよこ豆、胡麻などのさまざまな豆類であ



り、胡麻からは油も作られた。中央アジアの産業で根本的な意味をもつのが綿花栽培である。その栽培には、地元農民と並んでタタール農民も携わっていた。野菜栽培や園芸は、主として都市部や近郊の農民が自分の土地や借用地で行なったものである。

畜産に従事するタタールも十分多かった。畜産を行なった1817人のうち、1416人がカザフスタンに、401人が中央アジアに住んでいた。タタールの畜産業者は主に、羊と馬の畜産に従事していた。プルジェヴァリスクに住んでいた第二ギルドの商人ファティフ・スレイマノフのように、いく人かのタタールは大農場を営んでいた。ファティフ・スレイマノフは、地元の馬の品種を改良して良い結果を残した最初の一人である。国立品種改良局のマルティソン歩兵大将に宛てられた書簡では、スレイマノフの農場で育てられている動物たちは「トルキスタン軍管区の騎兵隊や砲兵隊に納入されていて、そのうち傑出した個体は何度となく、セミレチエ州の馬術大会で国立品種改良総局の賞や勲章を受賞した」<sup>39)</sup>。

中央アジア最初の養蜂家はタタールであり、タシケントからそれほど遠くない山間部の村の一つに住み、1871年に養蜂を始めた。1890年代には西シベリアにあったアレクサンドロフスタ郷の山村に、養蜂を主に行なう小さなグループが存在した。この郷の7つの村に、730の養蜂箱があった<sup>40)</sup>。1897年には、75人のタタールが養蜂と養蚕に従事していた。

漁業、狩猟、林業に携わったタタールは少数であった。

中央アジアの産業はとりわけ、綿花から種を取り除く作業、搾油作業、絹糸の紡績作業、石鹼製造作業などの初期的な原料加工に関連していた。大工場による産業は主として大都市に集中していた。蒸留酒工場やビール工場、ワイン工場、タバコ工場（ただし、ロシア人が経営）、綿花加工工場、果実缶詰工場、革製品工場、獣脂製造工場などがそれにあたる。

産業施設の中で19世紀末に飛躍的に発展した

のが綿花加工工場であった。そこには、その時代としては十分に良い設備を備えたさまざまな種類の機械があり、蒸気や灯油による動力で水の動きを生むプレス機械もその一つであった。綿花加工工場の所有者の中にはタタールもいた。サリホフが所有していた工場は灯油を動力としていて、プレス機械2台を備え、チャドル・ミタン郷の村にあった。ファイジロフの商館には手動のプレス機を備えた水力による綿花加工工場があり、それはサマルカンド州カタ・クルガン郡パイシャンバ村にあった<sup>41)</sup>。ヤウシェフ兄弟の商館には、ネジ式プレス機を備えた水力の綿花加工工場がシルダリア州タシケント郡ブスケント郷のハン・アルク村にあった。この兄弟は、タシケント郊外のケレスやアリンケントにも工場を持っていた<sup>42)</sup>。これらの綿花工場では、タタール、ロシア人、ユダヤ人、ウズベク人、タジク人など、さまざまな民族の労働者や従業員が働いていた。

手工業の零細企業で働くタタールの数も多かった。縫製業で働いていたタタールは3047人もいたが、これは明らかにタタールこそ中央アジアに最初の縫製機械を持ち込んだ人びとであるという事実と関連している<sup>43)</sup>。3333人ものタタールが修繕、住居管理、建設業で、石工、大工、鍛冶、指物師として働いていた。原料加工の手工業で働いていたタタールは小規模であった。畜産業が759人、金属加工が534人、農作物加工が525人、林業が265人、繊維加工が249人、その他の加工業が10～100人であった。工業分野で働いていたタタールは全タタールの15.5%であり、その多くは都市部に住んでいた。

#### (7) タタール住民の性別・年齢別構成<sup>44)</sup>

(\* フェルガナ州を除く)

ロシア革命以前の時代には、10歳か、それよりも小さい頃から労働を始めることが稀ではなかったことを考えれば、労働人口の下限は10～19歳ということになる。定年に入るのは通常、

かなり歳をとってからであったので、労働人口の上限は60歳以上に届いたかもしれない。タタールの労働人口は性別に関わらず、74.1%に達し、10歳未満の子供で25.8%、高齢者で0.1%であった。このように、この時代の中央アジアのタタール住民の中心はやはり生産年齢人口ということになる。性別で見ると、男性の労働人口は76%、女性では72.1%であった。都市部では郡部よりもやや大きくなり、それぞれ75%と73.1%となる。この違いはある程度は、商工業の発展によるとも、タタールの農地取得に対する帝政行政の制限によるものとも言える。総じて19世紀後半の中央アジアにはかなりの数のタタール労働人口が流入・定着し、物質的にも精神的にも新しい文明をもたらす活動に加わっていた。

#### (8) タタール住民の識字率<sup>45)</sup>

(\*フェルガナ州を除く)

中央アジアのタタール住民のうち、識字能力がある者は1万5855人で全タタール中、26.7%を占めた。識字能力のある者のうちで、ロシア語の識字能力がある者が19.3%、母語であるタタール語の識字能力がある者が80.2%、後期中等教育を受けた者が0.5%であった。これを全タタールからみると、それぞれ5.2%、21.4%、0.1%となる。トルキスタンではカザフスタンに比べると少し数値が高く、後期中等教育の修了者がトルキスタンで1.5%、カザフスタンで0.2%、ロシア語の識字者がそれぞれ24%と17.4%であった。逆に、カザフスタンでは母語の識字者がより多かった(74.5%に対して82.4%)。カザフスタンのこうした状況は明らかに、トルキスタンよりもこの地において早くからタタールが来住していたことによるものである。識字率が最も高かったのは10~19歳の年代であったが、これはある程度、資本主義の発展により識字者に対するニーズが高まったことによるものと言える。この事実、タタール識字者の最も高い数字(1万1058人、69.7%)が

都市部のタタールのものであることから確かめられる。

19世紀末に中央アジアに住んでいたタタールの人口と就業状況に関する全体像を分析すれば、以下のようになる。

1. 帝政政府の植民地政策の結果、当該地域におけるロシア人の移住が奨励され、他民族の移住は制限されたため、この地域におけるタタール人口は全住民の0.8%であった。タタール人口の多く(60.1%)は都市部に住んでいて、性別で見ると男性が女性よりも多かった。この地域には多くの若者、特に男性が集まってきたが、若い未婚の女性も少なくはなかった。彼らはここに定住して家族を作った。時には他民族の異性とも結婚したが、そのような結婚は多くはなかった。都市部在住の農民の数(32.3%)は郡部に住む農民の数(35%)と肩を並べていたが、これはある程度まで、農民の就業状況が変わり、多くの者が商業、手工業、工場勤務を行なうようになったことを表している。いずれにせよ農民こそタタールの生産人口の多くを占めたが、都市部には非生産的・半生産的な住民も相当数見られた。総じてこの地域のタタール住民には労働力の確かな潜在的な可能性、つまり、74.1%に及ぶ労働人口が高い識字率を示していることが指摘できる。
2. 帝政政府の反タタール政策の結果、多くの特権を有していたロシア人移民とは異なり、タタールも含む他民族の移民はこうした特権もなく、自発的な移民とされ、新しい土地にできる範囲で努力して定着することを強いられた。ゆえに、彼らは少数の例外を除けば、各地方に打ち捨てられたも同然であった。しかし、数が少なく打ち捨てられた状態に関わらず、中央アジアのタタールは民族的アイデンティティを維持し、地域の社会環境の中で溶けてなくなることもなく、彼らを同化に導き得る多くの

要因に抗したのである。

3. 若く労働可能なタタール住民は、地域のあらゆる社会経済的・宗教的な活動に参加した。生産や社会的な場に積極的に関わったタタール住民は地域の住民に対して進歩的な影響を与えた。と同時に、中央アジアに住む他民族の文化的要素も吸収した。

こうしたプロセスのすべては、ロシア帝国が課した法的・行政的な制約に反して、19世紀後半のこの地域の社会経済的な活動に自分たちの場所を確保することを可能にしたのである。

#### 原注

- 1) Gafurov, B.G. Istoriia tadjihskogo naroda. - M., 1955. - S.428. [ガフーロフ『タジク人の歴史』, モスクワ, 1955年, 428頁]
- 2) Volzhskii vestnik, -1885. - No.106. [[「ヴォルガ・ヴェストニーク」], 1885年, 106号]
- 3) Pervaia vseobshchaia perepis' naseleniia Rosiiskoi Imperii 1897g. Tablitsa «raspredelenie nalichnogo naseleniia». - S.1. [第1回ロシア帝国国勢調査(1897年)表「現住民の分布」, 1頁]
- 4) Pervaia vseobshchaia perepis' naseleniia Rosiiskoi Imperii 1897g. : LXXXVIII, Ural'skaia obl. - SPb., 1905 - S.48; LXXXI Akmolinskaia obl. - SPb., 1905 - S.50; LXXXIV Semipalatinskaia obl. - SPb., 1905 - S.54; LXXXVII Turgaiskaia obl. - SPb., 1905 - S.38; LXXXV Semirechenskaia obl. - SPb., 1905 - S.52; LXXXVI Sirdar'inskaia obl. - SPb., 1905 - S.56; LXXXII Zakaspiiskaia obl. - SPb., 1905 - S.54; LXXXIX Ferganskaia obl. - SPb., 1905 - S.60; LXXXIII Samarkandskaia obl. - SPb., 1905 - S.48.  
[第1回ロシア帝国国勢調査(1897年)「88. ウラル州」サンクトペテルブルク, 1905年, 48頁;「81. アクモラ州」サンクトペテルブルク, 1905年, 50頁;「84. セミパラチンスク州」サンクトペテルブルク, 1905年, 54頁;「87. トウルガイ州」サンクトペテルブルク, 1905年, 38頁;「85. セミレチエ州」サンクトペテルブルク, 1905年, 52頁;「86. シルダリア州」サンクトペテルブルク, 1905年, 56頁;「82. ザカスピ州」サンクトペテルブルク, 1905年, 54頁;「89. フェルガナ州」サンクトペテルブルク, 1905年, 60頁;「83. サマルカンド州」サンクトペテルブルク, 1905年, 48頁]
- 5) Zagidullin I.K. Musul'manskoe bogosluzhenie v uchrezhdeniakh Rosiiskoi Imperii - Kazan', 2006. - S.162-197. [ザギドゥッリン『ロシア帝国施設におけるムスリムの祈祷』, カザン, 2006年, 162~197頁]
- 6) Pervaia vseobshchaia perepis' naseleniia Rosiiskoi Imperii 1897g. sm. sn.4 [第1回ロシア帝国国勢調査(1897年)] \*原注4を参照
- 7) Galuzo, P.G. Turkestan - koloniia. - M., 1929. - S.5-6. [ガルーツ『トルキスタン植民地』モスクワ, 1929年, 5~6頁]
- 8) Tsentral'nyi gosudarstvennyi arkhiv Respubliki Uzbekistana, f.1, op.31, ed.khr.123, 137. [ウズベキスタン共和国国立中央文書館, ファンド1, 目録31, 保存単位123, シート37]
- 9) Tsentral'nyi gosudarstvennyi arkhiv Respubliki Uzbekistana, f.1, op.27, ed.khr.58, 11.51ob. [ウズベキスタン共和国国立中央文書館, ファンド1, 目録27, 保存単位58, シート51裏面]
- 10) Pervaia vseobshchaia perepis' naseleniia Rosiiskoi Imperii 1897g. sm. sn.4 [第1回ロシア帝国国勢調査(1897年), \*原注4を参照]
- 11) Tam zhe, Turgaiskaia obl., s. X. [同上, トウルガイ州, 10]
- 12) Tam zhe, sm. sn.4; Tablitsa XVI Raspredelenie naseleniia po semeinomu sostoiianiiu i rodnomu iazyku. [同上, 原注4参照, 図16「家族状況と母語による住民の分布」]
- 13) Tam zhe, Zakaspiiskaia obl., s. VII. [同上, ザカスピ州, 7]
- 14) Akhmarov, G.N. Svadebnyi obryady kazanskikh tatar. - Kazan', 1907. - S.35. [アフマロフ『カザン・タタールの婚姻儀礼』, カザン, 1907年, 35頁]
- 15) Pervaia vseobshchaia perepis' naseleniia Rosiiskoi Imperii 1897g. sm. sn.4; Tablitsa XXIV Raspredelenie naseleniia po rodnomu iazyku, sosloviam i sostoiianiam. [第1回ロシア帝国国勢調査(1897年), \*原注4を参照, 図24「母語, 階層, 財産による住民の分布」]
- 16) Tam zhe, Turgaiskaia obl., s. VIII. [同上, トウルガイ州, 8]
- 17) Yashnov E. Kolonizatsiia Turkestana za poslednie godi // Voprosi kolonizatsii. Periodicheskii sbornik. - PTGR. No.18, 1916. - s.102. [ヤシュノフ『近年のトルキスタンの植民地化/植民地化問題, 定期刊行論集』PTGR No.18, 1916, 102頁]
- 18) Tsentral'nyi gosudarstvennyi arkhiv Respubliki Uzbekistana, f.1, op.17, ed.khr.1021, 11.141., 157. [ウズベキスタン共和国国立中央文書館, ファンド1, 目録17, 保存単位1021, シート141, 157]
- 19) Tsentral'nyi gosudarstvennyi arkhiv Respubliki Uzbekistana, f.87, op.1, ed.khr.25039, 11.1-7. [ウズベキスタン共和国国立中央文書館, ファンド

- 87, 目録1, 保存単位25039, シート1~7]
- 20) Tsentral'nyi gosudarstvennyi arkhiv Respubliki Uzbekistana, f.1, op.17, ed.khr.1043, l.1. [ウズベキスタン共和国国立中央文書館, ファンド1, 目録17, 保存単位1043, シート1]
- 21) Dal' V. Tolkovii slovar'. T.II. - M., 1955. - S.72. [ダーリ『ロシア語辞典』(第6版), モスクワ, 1955年, 72頁]
- 22) Tsentral'nyi gosudarstvennyi arkhiv Respubliki Uzbekistana, f.87, op.1, ed.khr.25077, l.17-32. [ウズベキスタン共和国国立中央文書館, ファンド8, 目録1, 保存単位25077, シート7~32]
- 23) Tsentral'nyi gosudarstvennyi arkhiv Respubliki Uzbekistana, f.122, op.1, ed.khr.46, l.16-7. [ウズベキスタン共和国国立中央文書館, ファンド122, 目録1, 保存単位46, シート6~7]
- 24) Tsentral'nyi gosudarstvennyi arkhiv Respubliki Uzbekistana, f.87, op.1, ed.khr.26064, l.72. [ウズベキスタン共和国国立中央文書館, ファンド87, 目録1, 保存単位26064, シート72]
- 25) Tsentral'nyi gosudarstvennyi arkhiv Respubliki Uzbekistana, f.1, op.19, ed.khr.49, l.11-6. [ウズベキスタン共和国国立中央文書館, ファンド1, 目録19, 保存単位49, シート1~6]
- 26) Tsentral'nyi gosudarstvennyi Istoricheskii arkhiv Sankt-Peterburga, f.1281, op.4, ed.khr.4, l.139ob. [サンクトペテルブルク国立中央歴史文書館, ファンド1281, 目録4, 保存単位4, シート39裏面]
- 27) Yashnov E. Kolonizatsiia Turkestana za poslednie godi // Voprosy kolonizatsii. Periodicheskii sbornik. - PTGR. No.18, 1916. - s.103. [ヤシュノフ『近年のトルキスタンの植民地化/植民地化問題, 定期刊行論集』PTGR No.18, 1916, 103頁]
- 28) Pervaia vseobshchaia perepis' naseleniia Rosiiskoi Imperii 1897g. sm. sn.4; Tablitsa XXII Raspredelenie naseleniia po gruppam zaniatii i po narodnostiam na osnovanii rodnogo iazyka. [第1回ロシア帝国国勢調査(1897年), \*原注4を参照, 図22 職業グループ, 母語を基にした民族所属による住民の分布]
- 29) Tsentral'nyi gosudarstvennyi arkhiv Respubliki Uzbekistana, f.1, op.19, ed.khr.10, l.7.; f.1, op.17, ed.khr.1021, l.2. [ウズベキスタン共和国国立中央文書館, ファンド1, 目録19, 保存単位10, シート17/ファンド1, 目録17, 保存単位1021, シート2]
- 30) Bartol'd B.B. Istoriya kul'turnoi zhizni Turkestana. Leningrad, 1927. S.168. [バリトルド, トルキスタンの文化生活史, レニングラード, 1927年, 168頁]
- 31) Proekt vsepoddaneishchego otcheta general-gubernatora K.P. von-Kaufmana po gradzhanskomu upravleniiu i ustroistovu v oblastiakh Turkestanskogo general-gubernatorstva. 1867-1881gg. SPb., 1885. S.206. [「トルキスタン総督領諸州の民生状況(1867~1881年)に関するフォン・カウフマン総督の謹呈報告書草案」サンクトペテルブルク, 1885年, 206頁]
- 32) Bartol'd B.B. Istoriya kul'turnoi zhizni Turkestana. Leningrad, 1927. S.123-124. [バリトルド, トルキスタンの文化生活史, レニングラード, 1927年, 123~124頁]
- 33) Tsentral'nyi gosudarstvennyi arkhiv Respubliki Uzbekistana, f.98, op.1, ed.khr.15, l.15-8. [ウズベキスタン共和国国立中央文書館, ファンド98, 目録1, 保存単位15, シート5~8]
- 34) Kunavina G.S. Formirovanie zheleznodorozhno proletariata v Turkestane (1881-1914gg.). Tashkent, 1967, S.25. [クナヴィナ『トルキスタンにおける鉄道プロレタリアートの形成(1881~1914年)』タシケント, 1967年, 25頁]
- 35) Tam zhe, s.37. [同書, 37頁]
- 36) Tam zhe, s.74-75. [同書, 74~75頁]
- 37) Tam zhe, s.83. [同書, 83頁]
- 38) Ferganskie oblastnie vedomosti. - 1908, No.5. [「フェルガナ州新聞」1908年5号]
- 39) Tsentral'nyi gosudarstvennyi arkhiv Respubliki Uzbekistana, f.1, op.17, ed.khr.1021, l.6. [ウズベキスタン共和国国立中央文書館, ファンド1, 目録17, 保存単位1021, シート6]
- 40) Tsentral'nyi gosudarstvennyi arkhiv Respubliki Uzbekistana, f.1, op.11, ed.khr.695, ll.57-57ob. [ウズベキスタン共和国国立中央文書館, ファンド1, 目録11, 保存単位695, シート57~57裏面]
- 41) Geier I.I. Turkestan. Tashkent, - 1909. - S.242. [ゲイエル『トルキスタン』タシケント, 1909年, 242頁]
- 42) Tsentral'nyi gosudarstvennyi arkhiv Respubliki Uzbekistana, f.98, op.1, ed.khr.1-a, l.12-13.; ed.khr.15, l.111-12. [ウズベキスタン共和国国立中央文書館, ファンド98, 目録1, 保存単位1a, シート2~13/保存単位15, シート11~12]
- 43) Geier I.I. Turkestan. Tashkent, - 1909. - S.108. [ゲイエル『トルキスタン』タシケント, 1909年, 108頁]
- 44) Pervaia vseobshchaia perepis' naseleniia Rosiiskoi Imperii 1897g. sm. sn.4; Tablitsa XV Raspredelenie naseleniia po rodnomu iazyku, gramotnosti i vozrastnim gruppam. [第1回ロシア帝国国勢調査(1897年), \*原注4を参照, 図15「母語, 識字率, 年齢グループによる住民の分布」]
- 45) Tam zhe. [同上]